

看護技術のチェックリスト作成とその効果と課題

—自己評価と他者評価を用いて—

土井 英子¹⁾*・杉本 幸枝¹⁾・小野晴子¹⁾

1) 看護学科

(2005年11月9日受理)

看護学生が実習で経験できるレベルまで、学内で看護技術を習得できるような看護技術教育が希求の課題である。そこで今回、繰り返し練習できるように自己評価と他者評価ができるチェックリストを作成した。その結果、「排泄の援助」以外の技術項目でチェックリストを用いたおよびチェックリストが役立ったと回答した者は、日常生活援助技術の項目ができると回答しており、チェックリストを用いての練習は「できる」技術への習得につながっていることがわかった。他者評価は、客観的に評価できる指標になり、自己の技術を振り返ることで、不十分な点にも気づけ修正できることがうかがわれた。実習には一定の水準以上の「できる」技術になってから臨む必要があり、今後は基礎看護学実習だけではなく、領域実習前にチェックリストを活用できるように検討が必要である。

はじめに

平成15年3月に厚生労働省より、看護教育の在り方に関する検討会報告「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準」が示された¹⁾。その中の臨地実習において学生が行う基本的な看護技術の考え方として、①技術の実施に当たっては患者の権利の保障と安全性の確保を最優先に考えて臨ませることとし、また、事前に患者・家族に十分かつ分かりやすい説明を行い、同意を得て行わせること、②学生による技術の実施に当たっては、実施する援助内容についての説明能力を十分につけさせるとともに、事前に実践可能なレベルにまで技術を修得させておくことが明記されている。しかし、臨地実習において、看護学生が臨地実習で経験できるだけの到達度を習得しているとは言いがたい現状も指摘されている²⁾。実習で経験させてもよいレベルまで、学内で看護技術を修得できるような看護技術教育が希求の課

題である。そこで今回、従来の主体的に学ぶことを中心として筆者らが作成した演習ノートや援助技術論ワークブック³⁾の内容に加えて、繰り返し練習できるように自己評価と他者評価ができるチェックリストを作成した。学生がこのチェックリストを主体的に活用することで、どの程度学習効果があるのかについて考察したので報告する。

1. 研究方法

1. 調査方法：自記式質問紙調査（筆者らが作成）
2. 研究期間：平成17年4月～7月
3. 研究対象：A短期大学看護学科1年生
4. 調査内容：援助技術論Bの科目のうち、チェックリストを使った演習を行った単元のチェックリストの活用度と役立ち度と技術習得度を5段階評価で調査した。
5. 分析方法：チェックリストの役立ち度と到達度の集計は5段階評価を3段階で分析した。

*連絡先：土井英子 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

6. 統計処理はSPSS12J for Windowsを用いて、 χ^2 検定を行った。また、自由記載を内容分析の手法を用いて分析した。

7. 倫理的配慮：調査対象に研究の主旨を説明、承諾の得られた対象に質問紙を配布した。質問用紙は無記名で、調査結果を本研究以外の目的では使用しないことを明記し、調査への協力は対象者本人の自由意思によるものとし協力を求めた。その際、研究に回答することで回答者の個人評価や成績評価をするものではないこと、また調査に協力しないことで不利益を受けることは一切ないことを説明した。

II. 本学での看護技術教育（援助技術論B）の取り組み

1. 「演習ノート」を用いた看護技術教育（表1参照）

援助技術の習得にあたっては、演習ノートを活用しながら各技術項目の目的を意識し、具体的な行為とその根拠を理解できるように工夫している。演習ノートの成り立ちには各技術項目に「技術目的」「学習目標」を示し、事前学習として「援助のための基礎知識」「VTR」を視聴し、さらに「参考文献」を活用して「事例」に対して必要と考えられる「援助計画」を立案したのち、演習に臨むようにしている。「援助計画」を考える場合に「事例」からその対象は何ができて何ができないか、どのような状態で何に注意を払えばよいかなどの留意点および根拠を書くようにしている。演習後には「課題」を提示し、レポートを課して

いる。さらに、今年から自己評価と他者評価ができるチェックリストを作成し、演習時と事後学習で繰り返して練習するように指導した。

2. 援助技術論Bの技術評価について

援助技術論Bは専門分野の基礎看護学領域の内容で、看護師が専門職として日常生活援助技術を実践する上で必要となる知識・技術・態度が問われる看護技術の演習である。科目の目的は対象の日常生活上の健康問題を理解し、専門的に援助するための実践能力を養うとしている。援助技術論Bの科目内容は、「ベッドメイキング」「安楽な体位と体位変換の援助」「歩行と移動の援助」「清拭と寝衣交換」「洗髪」「食事の援助」「排泄の援助」であり、看護学科1年次生の4月から開講している。5月中旬に上級生と教員による「ベッドメイキング」の技術チェックと7月中旬に「洗髪」「車椅子による移動の援助」「背部清拭と寝衣交換」の実技試験を行っている。

III. 結果

1. 対象者の背景

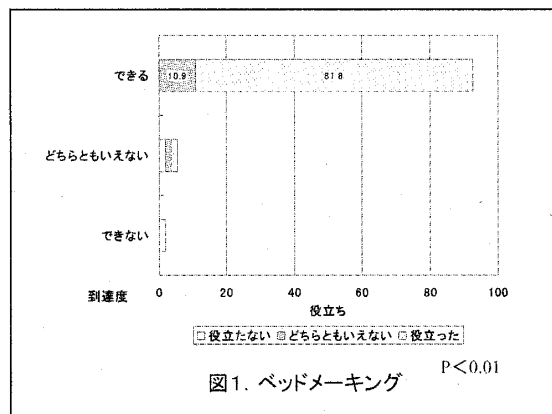
A短期大学看護学科1年62人のうち、回答を得られたのは56人（回収率90.3%）であった。

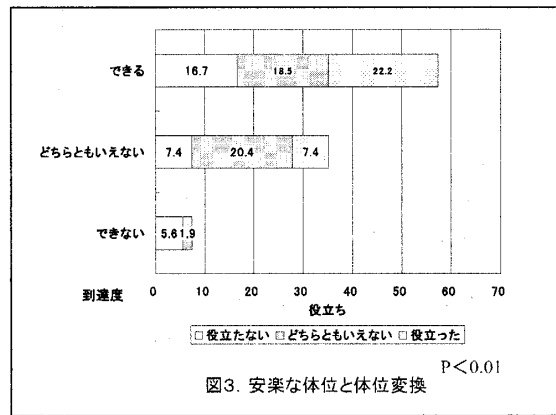
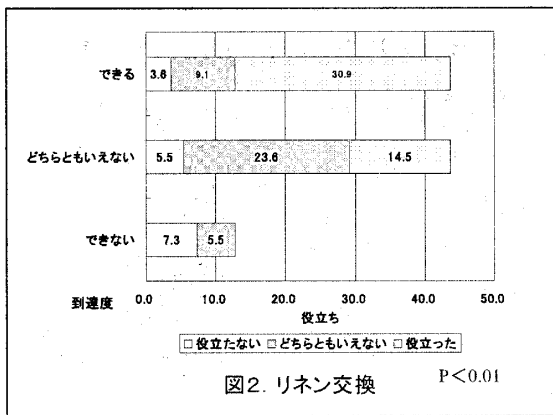
2. 各技術項目のチェックリストの活用度とその学生の自己評価

1) チェックリストの活用度

チェックリストの活用度では、ベッドメイキングは「あてはまる」40.4%、「ややあてはまる」39.3%と合わせて79.7%の者が用いたと回答している。「全くあてはまらない」「あてはまらない」

表1. 演習ノートの概要	
知識と必要性の判断ができる根拠のある技術	
1. 援助目的	5. 演習の展開
2. 学習目標	①事例の提示
①知識	②援助計画(手順・留意点)記入
②必要性の理解	③VTR
③実施できる。	④デモスト
④配慮できる。	⑤演習
3. 援助のための基礎知識	⑥まとめ
①用語の定義	6. 課題
②解剖・生理	7. チェックリスト
4. 参考文献	



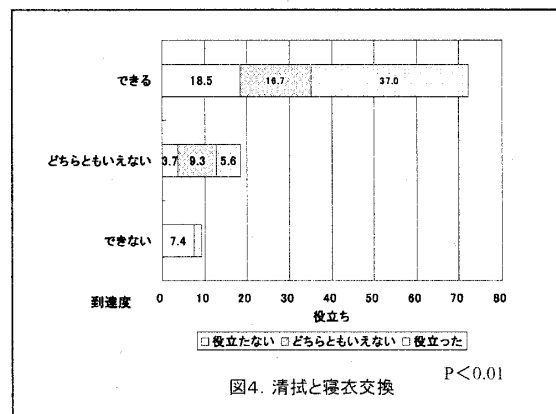


と回答した者はわずか5.4%であった。リネン交換では、「あてはまる」12.5%、「ややあてはまる」37.5%と合わせて50.0%の者が用いたと回答している。「全くあてはまらない」「あてはまらない」と回答した者は23.3%であった。安楽な体位と体位変換では、「あてはまる」1.8%、「ややあてはまる」27.3%と合わせて29.1%の者が用いたと回答している。「全くあてはまらない」1.8%「あてはまらない」30.9%で用いていない者は32.7%であった。清拭と寝衣交換では、「あてはまる」9.1%、「ややあてはまる」40.0%と合わせて49.1%の者が用いたと回答している。「全くあてはまらない」5.5%「あてはまらない」34.5%と用いていない者は40.0%であった。洗髪では、「あてはまる」10.9%、「ややあてはまる」27.3%と合わせて38.2%の者が用いたと回答している。「全くあてはまらない」7.3%「あてはまらない」40.4%で用いていない者は47.7%であった。排泄の援助の技術習得に対して、チェックリストを用いたかでは、「あてはまる」5.5%、「ややあてはまる」14.5%と合わせて20.0%の者が用いたと回答している。「全くあてはまらない」14.5%「あてはまらない」41.8%で用いていない者は56.3%であった。

以上のように各技術項目のチェックリストの活用度を比較すると、活用度が高い項目はベッドメイキングであり、次にリネン交換、清拭と寝衣交換、続いて体位変換と安楽な体位、洗髪、排泄の援助の順であった。

2) チェックリストの役立ちと自己評価

項目別にチェックリストの役立ちと技術の自己評価をみると、ベッドメイキングは、図1のよう



に「役立った」と回答した者は46人（83.6%）であり、「できる」と回答したものは51人（92.7%）であった。また、「役立った」と回答し、「できる」と回答した者は、45人（81.8%）と最も多く、次いで役立ちは「どちらともいえない」が「できる」と回答している者は6人（10.9%）であった（ $p<0.01$ ）。

リネン交換は、図2のように「役立った」と回答した者は25人（45.5%）であり、「できる」と回答したものは24人（43.6%）であった。「役立った」と回答し、「できる」と回答した者は、17人（30.9%）であった。次いで役立ちと自己評価とも「どちらともいえない」と回答したものが、13人（23.6%）であった（ $p<0.01$ ）。

体位変換と安楽な体位は、図3のように「役立った」と回答した者は16人（29.6%）であり、「できる」と回答したものは31人（57.4%）であった。「役立った」と回答し、「できる」と回答した者は、12人（22.2%）であった。次いで役立ちと自己評価とも「どちらともいえない」と回答し

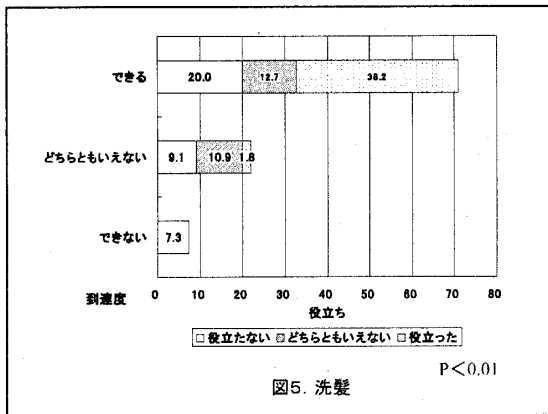


表2.チェックリストでよかったこと(自由記載)

- ×だったら○にしようかと思って、さらに練習して技術を高めていける(6)
- できるようになっていくことが分かるのでよかった(3)
- 演習を振り返って、どこに注意すればいいかが分かる(3)
- 次に生かせるように努力できる(15)
- 細かく書いてあったので練習する上で参考になった(5)
- 一つ一つ確認することができ、技術の習得につながった
- テストで、どの点に気をつければよいか理解することができた(2)
- 重要ポイントが分かってよかった(16)
- ベットメーカーは、2年生にチェックしてもらい活用した(3)
- いろいろな人のアドバイスが聞ける(4)
- 自己評価と他者評価は自分では気づいていなかった点に気づける(4)
- 手順として見れる(3)
- 事前学習でVTRを視るときも役立つ

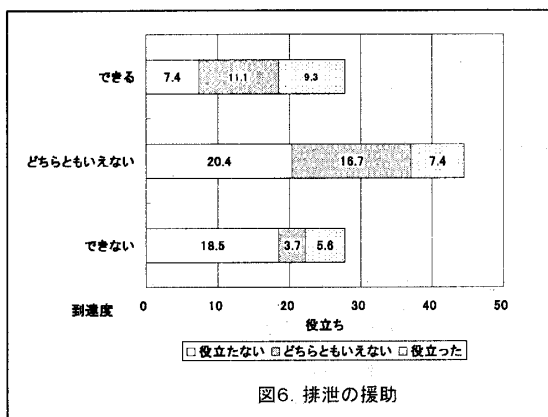


表3.チェックリストで困ったこと(自由記載)

- 内容・意味が難しい文は評価しにくい(4)
- 項目や◎○△×の数が多いためにつけにくい(5)
- チェックリストを練習するたびに付けるのは大変(4)
- 自己評価は後で思い出すという形になる(3)
- 練習時、チェックをつけることを忘れる(4)
- 練習するとき持ってくるのを忘れる(2)
- 試験やチェック以外使うことがなかった(5)
- 演習中はつける時間がなかった(5)
- 一人一人の基準が違うので段階評価するのが難しい(3)
- 他者評価は優しくつけてしまう
- 他者評価はチェックしてくれる相手をみつけないといけないので大変(5)

たものが、11人(20.4%)であった(p<0.01)。

清拭と寝衣交換は、図4のように「役立った」と回答した者は24人(44.4%)であり、「できる」と回答したものは39人(72.2%)であった。「役立った」と回答し、「できる」と回答した者は、20人(37.0%)であった(p<0.01)。

洗髪は、図5のように「役立った」と回答した者は22人(40.0%)であり、「できる」と回答したものは39人(70.9%)であった。「役立った」と回答し、「できる」と回答した者は、21人(38.2%)であった(p<0.01)。

排泄は、図6のように「役立たなかった」と回答したものは25人(46.3%)であり、「できない」と回答したものは15人(27.8%)であった。さらに「役立った」と回答し、「できる」と回答した者は、5人(9.3%)と少なく、チェックリストの役立ちと自己評価には関連はみられなかった。

以上のように、技術項目の習得度を比較すると、できると回答したものが一番多い項目はベットメーカーであり、次に洗髪、清拭と寝衣交換、続

いて体位変換と安楽な体位、リネン交換、排泄の援助であった。また、排泄の援助の以外の技術項目でチェックリストを用いたと回答した者は、役立ったと回答している。

3. チェックリストについての自由記載から

1) よかったこと(表2参照)

チェックリストについて自由記載から良かったことを抽出すると、「×だったら○にしようかと思って、さらに練習して技術を高めていける」[できるようになっていくことが分かるのでよかった][演習を振り返って、どこに注意すればいいかが分かる][次に生かせるように努力できる][細かく書いてあったので練習する上で参考になった][一つ一つ確認することができ、技術の習得につながった][重要ポイントが分かってよかった][テストで、どの点に気をつければよいか理解することができた][ベットメーカーは、2年生にチェックしてもらい活用した][自己評価と他者評価は自分では気づいていなかった点に気づける][いろいろな人のアドバイスが聞ける]

[手順として見られる] [事前学習でVTRを視るときも役立つ] の13コードが抽出できた。

2) 困ったこと (表3参照)

チェックリストについて自由記載から困ったことを抽出すると、[内容・意味が難しい文は評価しにくい] [項目や◎○△×の数が多いのでつけにくい] [チェックリストを練習するたびに付けるのは大変] [自己評価は後で思い出すという形になる] [練習時、チェックをつけることを忘れる] [練習するとき持って来るのを忘れる] [試験やチェック以外使うことがなかった] [演習中はつける時間がなかった] [一人一人の基準が違うので段階評価するのが難しい] [他者評価は優しくつけてしまう] [他者評価はチェックしてくれる相手を見つけられないといけないので大変] の11コードであった。

IV. 考察

1. 各技術項目のチェックリストの効果と習得度

今回の調査結果から、排泄の援助以外の技術項目でチェックリストを用いたと回答した者は、役立ったと回答しており、各技術がチェックリストを用いることにより、各技術の習得につながっていることがうかがえる。

また、技術項目の自己評価が高い項目であるベッドメイキング・清拭と寝衣交換・洗髪の項目は、援助技術論Bの技術評価の項目であるため、これらの技術を繰り返して練習したことが関係していると考えられる。特に、[ベットメイキングは、2年生にチェックしてもらい活用した] [自己評価と他者評価と分けられているので自分では気づいていなかった点に気づける] [いろいろな人のアドバイスが聞ける] との記述のように、技術チェックを行い、初学者である1年生に2年生がアドバイスをすることで、技術の評価ができることも影響しているように思われる。

また、チェックリストは自己評価だけでなく他者評価を行う際に、客観的に評価できる指標になり、自己の技術を振り返ることで、不十分な点にも気づけ修正できることにもつながっていると思われる。清水裕子⁴⁾は、自己評価・他者評価を用

いた注射技術演習において、自己評価が他者評価よりも低い結果を報告しており、自信がもてるような状態に至らない段階での、模擬演習であることが自己評価の低さを示していると分析している。演習後にチェックリストを活用し、自信がもてる状態になるまで技術習得をすることは重要と考えられる。[前回できていなかったところが思い出せて、練習できる] [重要ポイントが分かってよかった] [テストで、どの点に気をつければよいか理解することができた] との記述のように、試験のために繰り返し練習し、チェックリストを活用したことで習得度が高くなったことに関連があると考えられる。

さらに、[×だったら○にしようかと思って、さらに練習して技術を高めていける] [できるようになっていくことが分かるということがよかった] との記述のように、学生が主体的に技術の練習ができるようなチェックリストの導入は効果があると考えられる。リネン交換は、ベッドメイキングの演習後の課題として、チェックリストを活用しての自己学習であったため、自己評価はリネン交換に比べて低いことがうかがわれた。看護技術の演習の時間がカリキュラム改正のたびに減少しており、全ての技術内容を演習することには限界がある。最低限習得しておかなければならない技術項目についても検討を要すると思われる。

2. 今後の課題

排泄の援助については、習得度が低い結果であった。これは、排泄の援助の演習内容は学生が患者体験をすることで患者の気持ちが理解でき、また実際の尿の観察をして、アセスメントできることなどを目標にしている。対象の羞恥心などが配慮できること、すなわち情意領域の習得を必要とするために、学生の自己評価が低くなったものと考えられる。排泄の援助の援助技術は単にテクニックや手順だけではなく、知識・技術・態度の習得が重要であるが、その患者の力を引き出す援助技術が「できる」ように、専門職としての態度の育成が重要と考えられる。

チェックリストの評価基準については、「◎：よくできる，○：できる，△：少しできない，×：できない」と記述していた。しかし、

[項目や◎○△×の数が多いのでつけにくい]、
[一人一人の基準が違うので段階評価するのが難しい]
[他者評価は優しくつけてしまう]との記述のように、
評価基準を「できる、努力を要する」の2段階で評価する必要性がうかがわれた。

チェックリストの使用方法については、
「練習するとき持って来るのを忘れる」
「試験やチェック以外使うことがなかった」
との記述のように、演習後の練習に
チェックリストを忘れていたりしやす
いことがわかった。チェックリストの
置き場所を実習室に作り、いつでも
練習時にチェックできるようにする
とよいと考えられる。藤内美保⁵⁾は、
技術チェックを3段階に分けて行っ
ているという報告をしている。その
内容は、第1段階として専門領域
の看護学実習の開始前に日常生活
援助技術を確実に身につける目的
に課外科目として行っている。実
習で患者に援助を行う時に、患者
を練習台にしてはならないことは
いまさら言うまでもないことであ
ろうが、一定の水準以上の「でき
る」技術にしてから実習には臨ま
なければならない。看護技術は
繰り返し行うことで身についてい
く。学生がチェックリストを用い
て主体的に学ぶことで技術の習
得が可能となるだろう。従来は
科目ごとの評価として技術評価
を行ってきたが、今後は

領域の臨地実習前の2年生後期
にチェックリストを用いて習得
した技術評価を行い、看護技術
の到達評価とするなど検討も一
考かと考える。

謝辞

本研究の調査に協力をいただいた
看護学科1年生の方に心から感謝
いたします。

引用文献

- 1) 看護学教育の在り方に関する研究会：看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標，2004
- 2) 升谷英子，井上智恵，河村葉子他：「身体侵襲を伴う看護技術」を臨地実習につなぐ教育の実践，看護展望，27(10)，35-45，2002
- 3) 石本傳江，杉本幸枝，土井英子他：援助技術論ワークブック，大空社，1999
- 4) 清水裕子：注射技術演習の評価の検討，看護教育，44(3)，230-234，2003
- 5) 藤内美保他：看護基本技術能力向上のための技術チェックプログラムの実施——大分県立看護科学大学の取り組み——，看護教育，46(1)，2005

Development of Nursing Technique Checklist and its Effects and Problems - Self-evaluation and Evaluation by Others -

Hideko DOI, Yukie SUGIMOTO, Haruko ONO

The Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585 Japan

Summary

Nursing technique education by which students can learn nursing techniques at school to the level of clinical nursing practice is an urgent issue. Therefore, we developed a checklist for both self-evaluation and evaluation by others so that students can periodically exercise assistance techniques. As a result, students who answered that they used the checklist, or the checklist was useful stated that they can perform daily life assistance technique items except "assistance in toileting." Thus, exercise using the checklist contributed to learning of the techniques. Evaluation by others showed that the checklist can be an objective parameter, and reflection of their own techniques enables them to notice their own inadequate points. Nurses should perform nursing practice after learning the techniques to certain levels. In the future, evaluation is necessary to use the checklist not only before basic nursing practice but also before nursing practice in each area.

Key words: Nursing technique education, checklist, Self-evaluation, evaluation by others